

Original title: WINTER IM SOMMER - FRÜHLING IM HERBST: ERINNERUNGEN

by Joachim Gauck, in Zusammenarbeit mit Helga Hirsch

© 2009 by Siedler Verlag

a division of Verlagsgruppe Random House GmbH, München, Germany

Published by arrangement through Meike Marx Literary Agency, Japan

ガウク自伝——夏に訪れた冬、秋に訪れた春

目次

第一章	『私がそこからやって来たところは……』	7
第二章	夏に訪れた冬	33
第三章	去るべきか、とどまるべきか	61
第四章	道を探して	109
第五章	布教活動スタート	131
第六章	社会主義の中に存在する教会とは？	153
第七章	赤い統制教育	171
第八章	例えば——落書きと国外追放	195
第九章	秋に訪れた春	211
第十章	人民議会、ついに自由選ばれて	253
第十一章	プランなき立ち上げ	269
第十二章	混乱の年月	297
第十三章	『私の考える自由』	353
第十四章	五月のベルリン	367
第十五章	三年が経って	371

訳注 380

人名リスト

398

訳者解説

414

関連年表

427

ガウク家の人々

431

写真提供者

432

第一章 『私がそこからやって来たところは……』^①

あの夏を訪れてみよう。それほど遠くない日々だ。ロストックの東、メクレンブルク地方のバルト海沿いに、フィッシュラントと呼ばれる細長い砂洲地帯がある。ポデンと呼ばれる入江^{ライン}を外海から細長く区切る砂洲に立つと、夏の暑さもしのぎやすい。その幅がわずか五百メートルに狭まったところに、海沿いの小さな村ヴストローがある。

五歳になるまでの日々を私が過ごしたヴストロー。今も心に残る最初の記憶はこの村に始まる。幼い私を間近にのぞきこむ母の顔、家、庭の木、明るい空。広大な海、祖母、暗い空。小さな妹、子どもたちの涙と喜び。すべては生まれて初めて見たものだ。

夏の日々を思い出すたびに、きまつて目に浮かぶ最初の情景がある。十二歳のとき、マリアンネおばさんの家に泊めてもらった。彼女は母の友人で、入江沿いのいかにも古風な木骨造^{もっこつぞう}の家に、二人の子どもと一緒に住んでいた。家に入ると粘土質のローム土でできた家畜用の暗い土間があり、奥に台所と居間が見え、猫たちが行ったり来たりしている。見上げると、梁の下に巣を作った燕たちが飛び込んだり、家の外へ飛び出たりした。

この家は、マリアンネの父親で、生粋のメクレンブルク人コノー爺さんのものだった。爺さんはポルトと呼ば

れる木製の小さなボートを持っていて、五十歩ほど離れた庭の端の、葦原が入江に少しせり出したあたりに自分だけの「港」を造って停めていた。私はボートに乗せてもらって、こぎ方と帆の使い方を教わった——ボートには帆を張ることもできたのだ。入江沿いの草原をまわって干し草を集めたり、刈り取り機に使うロープを対岸の郡庁所在地から運んだりするのも、このボートだった。もちろん爺さんは低地ドイツ語の方言をしゃべる。相手が土地の人だろうが、よそ者だろうが関係ない。たまに風の具合が絶好調のときなど、ボートを減速して帆を降ろさないでもすむよう、風に話しかけることもあった。

ボートに乗るのは、私と爺さんの孫のブルカルトだ。私たちが「上手に」ボートを扱うと、爺さんは褒めてくれる上に、農家風の台所でレックミルヒと呼ばれるほほ粒状の凝乳クワッセルをご馳走してくれる。もうすぐマリアンネが乳脂の攪拌に取り掛かるものなら、私は少し水気の残った濃黄色の新鮮なバターが猛烈に欲しくなるのだ。彼女は晩の食卓ででき上がったバターを樽から出して、黒パンの上になっぶり塗ってくれる。私たちはいつも腹をすかしている。風が吹いても、どんな天気でも、いつも戸外で、中庭で、草地で、入江で遊んでいるのだから。

その日はいつもと違って暴風雨だった。村の年寄りには、たいてい嵐は外海と入江に挟まれたフィツシユラントを避けて通るといだが、いったん嵐に見舞われると風雨はとても激しい。ブルカルトと私は台所の向かいにある小屋に逃げ込んだのだが、雷が空を引き裂くと震え上がった。そして、小屋の板屋根を太鼓のように叩く大きな雨音と、母屋の柔らかい葦ぶきの屋根に静かに浸み込む雨音に耳を傾けていた。

暗くなったので、マリアンネの台所にろうそくがともる。台所の扉の上半分が開いているので、彼女の働く姿が見える。私はその瞳を見るのが好きだ。幼い私には、彼女の瞳はいつも人生を肯定しているように思えたからだ。その目は、いつどこでも、そうしてきたに違いなかった。しかしこの夏、彼女のまなざしがとらえていたのは私だ。私は彼女の世界に属していると感じた。彼女は私を守ってくれた。さて、マリアンネは顔を上げる

と、小屋にいる私たちの方を見て微笑み、合図をくれる。もうすぐ夕食になるらしい。

明日には嵐は収まるだろう。明日はマリアンネが私たちをヴストローの教会に連れて行ってくれる日だ。毎週水曜日、教会堂では夏の晩の集いが開かれる。旅回りの楽師が演奏し、オルガンが奏でられる。そして最後に、いつもきまってる、ある歌が歌われる。私はその歌をすぐに覚えてしまうだろう。

一日は終わり、美しき飾りも終わります

イエス様、私のそばにいてください

今、夕暮れを迎えます

あなたの光を

消さないでください

地上の私たちのもとで

(ヨハンネス・エツカルト(一五五三―一六一一年)作詞『子どものための祈りの歌』)

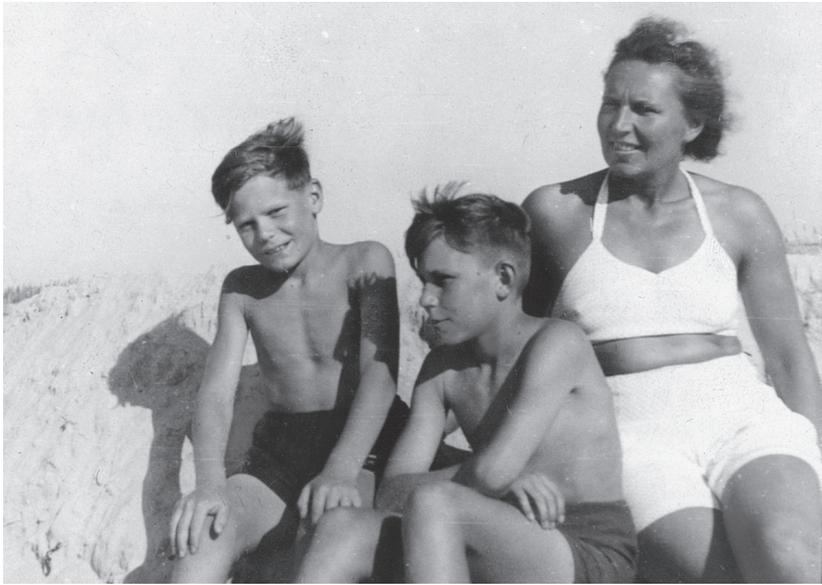
家への帰り道、入江に沿って自転車走らせながら、私はこの歌を口ずさんだ。今晚私はブルカルトと一緒に、古い小屋の隣の、以前子牛を飼育していた家畜小屋で寝るのだ。電灯もベッドもない中、ねずみやコウモリと一緒に藁の上に横になる。私たちは勇敢な一人前の少年なのだ。中庭に面した扉は開けっ放しになっていて、寝返りを打つと晴れた夜空の星々が鮮やかに見える。「一日は終わり、……／あなたの光を／消さないでください」。口ずさむうちに、いつしか私は寝入ってしまった。

それから三十年以上も経ったある日、西ドイツのラジオ番組に出演したロストック出身の作家ヴァルター・ケ

ンボヴスキーが「若い頃、故郷は苦しみの場所だった」と語るのを耳にしたことがある。そのとき私が彼に覚え
た反発は、今でも忘れられない。というのも、私にとって故郷は幸せの場所だったからだ。ただ、あの一九五二
年夏の日々の幸せは、実際にはその前年に我が家を襲った不幸と結びついていたのだが、私とその事情を知るの
は、それから二十年も経ってからのことである。当時マリアンネが私を泊めてくれたのは、その前年に私の父が
連行され、行方不明になったからだ。前年の夏に暗い出来事があったおかげで、彼女の家で過ごしたひと夏
の思い出が、それ以前の心象をすべて目立たなくしてしまったのだった。

家族と一緒にロストツクに引越した後も、一生を通して、ヴストロー村は私にとって避難所であり、いつで
もほっとした気持ちになれる拠り所だった。子ども時代も、独身のときも、結婚して子どもたちが生まれたとき
も、老年に達した現在も、いつもヴストローは私の大切な場所である。ロストツクを出発して、フィッシュラン
トへの道を左に曲がり、バルト海と平行に北東へ車を走らせ、遠くにヴストローの教会の塔が見えると、右手の
草地と葦原の向こうは入江だ。今でもここまで来ると、特別な温かさや内面の喜びが私を包む。たとえほんの短
い訪問に過ぎなくとも、故郷にいる気持ちになれる場所だ。

私の父ヨアヒム・ガウクと母オルガ・ガウクはこの土地の生まれではない。二人は結婚後の一九三八年に、今
のパーク通り——当時はアドルフ・ヒトラー通りと呼ばれていた——にあった航海学校の向かいの家を半分借り
た。父の父（私の祖父）はザクセン地方の出身ではあったが、父母ともメクレンブルク地方で育ったので、二人
にとってヴストローはまったくよその土地というわけではなかった。父はヴストローの航海学校に通い、まず航
海士の資格を取得した後、一九四〇年に外洋航海の船長資格A6を得て卒業した。しかし第二次世界大戦がはじ
まっていたため、船長として航海に出ることはなかった。もつとも父は、大学入学資格を取得した直後の見習水
夫時代から四本マストの帆船グスタフ号に乗り込み、世界中の港をまわっていた。我が家の家族アルバムには、



1952年の夏。母の友人マリアンネと息子のブルカルト、そして私。父が行方不明になった私たちが最初に過ごさねばならなかった夏、マリアンネは私に家庭的な幸せを提供してくれた。

オーストラリア、アフリカ、スカンジナビア、スマトラの国々の写真が残っている。最後はハンブルクのフェルデインント・ライース社に入り、アフリカのバナナや南国の果物をドイツに運んだ。母は父が陸に上がった機会を逃さず、しっかりとかまえたようだ。我が家で語り継がれてきた逸話を紹介しよう。三十一歳の若きガウクがカメラマンから帰国したとき、ハンブルクの船会社で出迎えた若きオルガ・ヴァレマンは、期待に胸を躍らせて尋ねたという。

「読んでいただいたかしら、私の手紙」。

父は手紙のことは何も知らなかった。

「じゃあ私たち明日、ブランケネーゼ（ハンブル西部の街区）で結婚するのをご存じなのね？」。

父はその場で結婚を決めたに違いない。

こうして母も、父が軍隊に徴集されて航海学校に通うようになったのを機に、ヴストロー村に住むことになった。村には父の母アントニー・ガウクがバルト海沿いに家を建てて、一人で住んでい

た。アントニーはメクレンブルク地方の小さな町ペンツリンで小規模ながらも畜産業を営む農家の娘で、実家は中世以来の都市農家〔都市の市民権を持ち、都市に属する耕作地で農業を営んだ〕だった。遺産はあったが、定期的な収入がなかった。そこで生計を安定させるため、ヴストローに夏のペンションを建てようと考えた。村の人々は反対した——「あの女、あんなところに家を建てようなんて、どうかしてないか」。外海に面した建設予定地が村からかなり離れていたからだ。しかし一九三六年、数名の休暇滞在客にも部屋を提供できる住居兼ペンションは完成した。

父がまだ幼い少年だった頃、父の母（私の祖母）アントニーは離婚した。その理由は誰も知らなかった。息子の父ですら、自分の父親の写真を一度も見ることがなく、ドレスデン出身の薬剤師だったと教わっただけだった。自尊心の強いメクレンブルク人だった祖母は、質問はおろか、噂さえも禁じてしまった。尋ねられても答えず、あらゆる記憶を消し、夫の名前をさっさと片付けたわけだ。父は成人した後も、散歩中に彼女が振り返り、愕然として思わず声を漏らすときなどに、いかに彼女が夫を拒絶してきたか、実感することができたという——「おまえはお父さんそっくりだ！」。離婚した後、祖母は独身を通した。そればかりか私の妹のマリアンネは、まだ小学生の頃から、祖母に男嫌いを吹き込まれたものだ——「男の子にのほせるんじゃないよ！」。

無愛想で意志が固く、わがままなところもあった祖母は、連れ合いがいなくても、実に存在感があった。ドイツ帝国時代の堂々とした家具と蔵書がびっしり詰まった書棚に囲まれた姿は、いかにも威風堂々としていた。ときおり私の母は義母を傲慢で支配欲が強いと感じたにちがいない。「お義母さんは物知りだから教わることも多いけれど、これ以上はダメという線を引かないと、いつも口を挟んでくるの」と母は妹のゲルダへ手紙で書いている。母は義母に対して、いくぶん距離を取っていた。

母自身は事務の職業訓練を受けた自立した女性だった。とりわけ実務の才にたけていた母だが、家事や子どもの教育のために、やむなく職業を断念した。母の両親フランツ・ヴァレマンとルイーゼ・ヴァレマンは、田舎の

訳者解説 「自由」と「民主主義」を求めて

本書は二〇一二年三月から二〇一七年三月までの任期で第十一代ドイツ連邦共和国大統領に就任したヨアヒム・ガウク（一九四〇年生まれ）の回想録 *Winter im Sommer - Frühling im Herbst* の全訳である。ガウクは東ドイツの福音主義教会牧師として、体制批判活動を行ってきた。一九九〇年、五十歳を過ぎて初めて体験した東独初の自由選挙が忘れられないという。この選挙の後、同年秋、東ドイツという国家はなくなり、西ドイツと一つになった。

本書の初版が出版された二〇〇九年、ドイツはベルリンの壁崩壊二十周年を祝った。一九八九年十一月九日の夕刻、社会主義統一党（SED）の政治局員ギュンター・シャボフスキーが記者会見で東ドイツ市民の旅行制限の大幅な緩和を発表したことがきっかけとなり、深夜から翌朝にかけて大勢の人々が検問所に押しかけ、国境を通過した。分断されていた東西ドイツ市民が感情を一つにして喜ぶ姿が世界中に放映されたこの夜は、冷戦時代が終わりを告げた瞬間として、今でも多くの人々の心に記憶されている。

壁がまだ存在していた頃、東ドイツ北部の港湾都市ロストックにヨアヒム・ガウク牧師がいた。党と政府が社会の統制を強める中、人々が自由に意見を言える唯一の場所となった教会には、社会からはじかれた人々や体制批判派が集まるようになり、その活動は次第に政治色を帯びた。東欧諸国が揺れ動いた一九八九年、教会は変革の担い手となった。ガウクは政治家になる決断をし、新フォーラムに参加。翌九〇年三月十八日に行われた人民議会選挙に立候補して、無所属の議員になった。

本書の前半は、主にこの東ドイツ時代の回想に当てられている。敗戦直後の幼少期の思い出に始まり、ソ連の

収容所に抑留されていた父親の帰還、妻との出会い、ロストック大学での学び、福音主義教会の活動、そして次第に教会が東ドイツ体制批判運動の一翼を担っていく様子が、バルト海沿岸の風光明媚な保養地フィッシュラントと中世ハンザ同盟以来の港湾都市ロストックを背景に描かれている。ゴルバチョフのソ連書記長就任以後、八〇年代後半の東ドイツ社会は動揺し、多くの人々が国を去った。去った人々の中にはガウク自身の三人の子どもたちもいた。抑圧的な国家が崩壊する喜びには、家族が離れ離れになる哀しみが混じった。

再統一後のドイツで彼を有名にしたのは、「旧東ドイツ国家保安省文書に関する連邦受託官 (Der Bundesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR)」としての活動である。冷戦時代の東ドイツでは、「シユタージ」と略称された国家保安省が元締めとなり、一般の人々を非公式協力者 (IM) に徴募して職場や私生活での発言や行動、人間関係などを詳しく報告させたばかりか、必要に応じて工作を行い、生活全般にわたって秘密裏に介入していた。工場、組合、大学、教会、作家同盟、ジャーナリズムなど、社会のあらゆる領域が監視や工作の対象になった。壁崩壊の時点で、総人口千六百万人の東ドイツ国内に、約九万人の国家保安省職員と十七万九千人ものIMが存在していたという。

東ドイツをナチに匹敵する第二の独裁体制とみなしたガウクは、監視社会を二度と繰り返さないためには過去を明るみに出さねばならないと主張し、シユタージが集めた膨大な報告文書を公開する仕組みの策定に尽力した。一九九〇年当時、新しい統一ドイツの国づくりをどのように進めるか、意見は分かれていた。IMが行ったスパイ活動を不問に付すか、事実を調査するか、国論は真つ二つに割れていたのである。連邦受託官に就任したガウクの事務局は「ガウク局」とも呼ばれ、統一後のドイツ社会が直面した困難を象徴する代名詞ともなった。本書の後半は、二期十年にわたって務めた受託官時代の回想が主な内容になっている。

ガウクは二〇一〇年と一二年の二回のドイツ連邦共和国大統領選挙に候補者の一人として推薦され、後者で過

半数の得票を得て大統領に選出された。ドイツ語原著は大統領就任前の〇九年に出版されたが、就任を機に新たに最後の一章が加筆され、十二年に新版が出版された。本訳書は十二年版にもとづいている。七〇年代に西ドイツ新左翼活動家として行動し、東欧諸国の共産党支配体制に幻滅したのを機にジャーナリズムの世界に入ったヘルガ・ヒルシュとの共著である。九〇年代の一時期にガウクの私生活上のパートナーだった彼女は、二〇一〇年の大統領選の際には選挙スタッフの一員としてガウクの選挙活動を支えた。大統領選候補者に推薦される以前に出版されたとはいえ、このような成立の事情を考えれば、政治家ガウクをとくに西ドイツの人々にアピールする意図が本書にあることは否定できない。しかし、それを認め、かつその分を割り引いて読んでみても、「自由」と「民主主義」を希求するガウクの姿勢には、彼の人生における終始一貫した真摯さが感じられることは間違いない。選挙対策のために書かれた安易な自伝と一線を画しているところに、本書の魅力がある。

「自由」と「民主主義」——ガウクの希求したのは、この二つだった。彼が前半生を生きた東ドイツに、この二つはなかった。東ドイツが瓦解したとき、彼は体制を徹底的に批判するとともに、これらをすでに実現していると思えた西ドイツに東ドイツになることを肯定した。このためガウクは、東からも、西からも、厳しく批判された。東ドイツの知識人層にとって彼は、社会主義の可能性を捨て、豊かな西ドイツに吸収されることを肯定した日和見主義者と映った。西ドイツの人々にとって彼は、秘密警察という暗い過去を徹底的に追求するあまり、宥和と和解を拒む、潔癖で頑固な男だった。

戦前のロストツクに生を受け、変革の八九年を挟んで東西の両ドイツを経験したガウクの回想録は、戦後ドイツの分断と再統一の価値ある証言である。もちろん、キリスト者として国家の敵となった彼の生き方は、東ドイツの大多数の人々の生き方とは異なる部分が多い。秘密警察に監視下され、国家の抑圧に日々晒された一方で、西ドイツとの交流が全面的に不可能になった後も西と接触を保つことのできた教会関係者として、彼はいわば特

権的な存在でもあった。以下、蛇足ながら解説を記して、本書の背景説明としたい。

東ドイツ時代——SEDの反教会政策と闘う

一九四五年五月に降伏したドイツは、オーデル川以東の旧東プロイセン地域などの領土を放棄し、残りを米ソ英仏の戦勝四カ国に分割統治された。四カ国のうち米英仏はドイツ西部とベルリン市西部を、ソ連はドイツ東部とベルリン市東部を占領したが、米英仏とソ連の対立が激しくなる中、四九年五月に米英仏占領地域がドイツ連邦共和国(西ドイツ)の建国を宣言すると、同年十月にはソ連占領地域がドイツ民主共和国(東ドイツ)として独立した。市場経済を導入して北大西洋条約機構に加盟した西ドイツと、計画経済を導入してワルシャワ条約機構の一員になった東ドイツとがにらみ合うことになったのである。ソ連の衛星国となった東ドイツでは建前上は複数政党制が導入されたが、実質的には、ドイツ共産党を軸に四六年に結成された社会主義統一党(SED)の一党独裁制が敷かれた。東西冷戦の最中、社会生活全般にわたる統制を強化したSEDは、公教育からキリスト者教育を締め出し、教会から教会税という収入源を断つなど、キリスト教会を弾圧した。

そもそもドイツ社会はキリスト教と密接な関わりがある。再統一後の現在のドイツでは、総人口約八千万人のうち、二千四百万人がカトリック教会に属し(二〇一三年)^①、二千三百万人が福音主義教会に属する(二〇一二年)^②。いずれも総人口のほぼ三〇パーセントであり、両者合わせると、人口のほぼ六割がキリスト教徒である。この場合、キリスト教徒であるということは、それぞれの教会に教会税を納めることを意味する。たとえば二〇一四年の教会税の年間総額は、カトリック教会は約五六億八千万ユーロ、福音主義教会は約五二億ユーロに達する(同年の為替相場は一ユーロ＝一三五円前後)。近年、教会の信者数は減少傾向にあるが、ここ数年のドイツ国内における景気回復のため、教会税の徴収総額は増えている。教会税は、教会の日常活動や病院、社会福祉施設

などの運営に当てられる。福音主義教会の社会福祉団体は約四五万人を常勤で雇用して二万七千の社会福祉施設を運営し、カトリック教会のカリタス連盟は約五九万人を常勤で雇用して社会福祉活動を行っている⁽⁵⁾。

東では福音主義教会の信徒が圧倒的に多かった。一九四六年に東ドイツが行った国勢調査によると、人口のほぼ八割の宗派は福音主義であり、カトリックはほぼ一割に過ぎない⁽⁶⁾。そのため東ドイツ建国当初、SEDは国民の大多数が属する福音主義教会と対立するのを控え、中立的な姿勢をとった。ところが東西冷戦が激しくなった五二年、方針を転換して教会の影響力の排除を断行し、教会関係者を国家保安省の監視下に置いた。五四年にはユーストマイエ、コンフィルマツイオン、成・年式を導入して、堅信礼の機会を信徒の子弟から奪い、五六年には教会税の徴収をやめて教会から財源を奪った。そのため六四年の国勢調査では、福音主義を宗派とする人々は人口の六割に減少するとともに、宗派のない人々が人口の三割を占めるにいたった。この当時の教会が受けた衝撃は、本書第四章に詳しい。当初は党の方針に反対し、子弟に成年式を受けさせないよう教会員に説いた教会だったが、結局は屈服し、堅信礼の実施時期をずらさざるを得なくなった。

ヨアヒム・ガウクが牧師としてロストック郊外の新興住宅地区に赴任したのは、ちょうどこの時期に当たっていた。教会員獲得のためにアパート一戸一戸を訪ね歩いた苦勞が、第五章で回想されている。

八〇年代に入ると、東ドイツの福音主義教会は「剣を鋤すに打ち直す」を標語とする平和運動を推進し、政治性を強めていった。ガウクの教会には、キリスト者に加えて、社会の同調圧力に違和感を抱く人々が集まった。建設兵として化学コンビナートに送られたトーマス・アブラハム。深夜のロストック市内に落書きを書いて投獄されたグナー、ウーテ、デルテ。西ドイツ政府の金銭提供による出国を体験したグナー。自動車のトランクルームに身をひそめて西ドイツに脱出したジビュレ・ハンマー。シュタージで埋め尽くされたギュストローの町を堂々と歩いて西ドイツ首相ヘルムート・シュミットを間近で見たバイアー。シュタージのIMでありながら、報告書

に本心を語ったスージー・ベルガー。本書に描かれたこれらの人々の体験には、圧力に屈しない普遍的な感覚がある。

国家と党の介入を受けない唯一の場所だった教会には、体制批判運動の担い手が集まった。当然、教会の内部にはIMがいて、切り崩し工作を行った。ガウクは、現在は閲覧可能となった、彼自身を対象になされた数々の諜報活動の記録も織り込みながら、当時シユタージが行った教会への工作の実態を暴いている。

一九八九年——東ドイツよりも西ドイツを望んだ現実主義者

一九八九年、人々はついに立ち上がった。同年九月、ライプツィヒの月曜デモなどを皮切りに、大勢の人々が街頭デモを敢行し、体制に対する不満を行動で示した。同調圧力と事なかれ主義に染まったかに見えた社会が、ついに動き始めたのである。

この激動のなかで政治家になる決断をしたガウクは、翌九〇年三月に行われた東ドイツ初の自由選挙による人民議会選挙に新フォーラムから立候補して、当選した。

当時、東ドイツ社会の崩壊を目の当たりにした体制批判派の多くは、早期のドイツ再統一に反対した。豊かな西ドイツに東が買ったたかるといふ危機感は強く、たとえ生活水準は西に及ばなくとも、東ドイツが四十年間で達成した完全雇用や男女平等の社会制度は維持されねばならないという意見が強かった。とくに知識人の間では、スターリン体制に忠実な秘密警察国家とは異なる、ヒューマンな社会主義国家に東ドイツを作り変える可能性に賭ける人々が多かった。

たとえば作家クリスタ・ヴォルフは、八九年十一月八日に東ドイツのテレビニュース番組に出演し、東の人々に「ここに残りましょう」と訴えた。彼女をはじめ、弁護士、政治家、教会監督、芸術家などの知識人は八九

年十月二十八日付で声明文「私たちの国のために」を発表し、かつて社会主義が理想として掲げたヒューマニズムの原点に戻り、西ドイツに対する社会主義的選^{オルターナティブ}択肢として東ドイツの自立を目ざすべく、署名活動を始めた（本書第九章）。

しかしガウクは声明文を「無意味な異議申し立て」と一蹴し、再統一に賛成したのだった。知識人は街頭デモを行う人々との接点を失っていると彼は感じたという。「何が民衆^{フォルク}のためになるのかは自分たちだけが知っている、しかし未熟な民衆は残念なことに、西ドイツ、とくにその首相ヘルムート・コールに誘惑されている」（二四六頁）という主張が知識人層を大衆から遊離させていたとガウクは回想している。

このような態度を示したガウクは、運動の仲間たちから批判された。第九章では、つかみあいの喧嘩をしかねない雰^{フム}囲気の中で、仲間の一人がガウクを非難して次のように言ったことが記されている——「ヨッヘン〔ヨアヒム〕、統一に賛成だなんて、どういうつもりだ？　ここは自分たちの国なんだぞ。自分たちの手できちんとやっていくべきだ」（二四三頁）。このように批判されてもガウクには、東ドイツ知識人が夢見た、人間的な顔を備えた社会主義体制を作る理想は、現実感を欠く少数者が大衆を主導する点で、共産主義時代と同様の大衆から遊離した発想に思えたのだろう。結局、西ドイツと同じ社会になることを訴えた点で、彼の立場は当時の西ドイツ首相ヘルムート・コールと重なったのだ。

現実を重視する彼の政治姿勢は、「西ドイツの平和主義者の友人たちとは異なり、平和と自由を守り、自分の人生や他人の人生を守るために、武器を手にとらねばならない時代もありうると考えていた。したがって一九九〇年代の私の立場は、バルカン半島で勃発した内戦で人々が殺害されるのを黙って見ていたくないと考え、軍事的に介入した人々に近かった」（二九一頁）と回想するところからもうかがえる。

一九九〇年三月十八日、東ドイツ初の自由選挙による人民議会選挙が行われた。選挙結果は反対派にとって

散々なものだったが、それでもガウクが所属した新フォーラムなどの選挙連合同盟九〇から十二人が当選した。彼はメクレンブルク・フォアポンメルン地方の市民運動を代表する唯一の議員として政治活動を始めた。

再統一されたドイツで——秘密警察の暗い過去と向き合う

東西ドイツが再統一した一九九〇年十月二日に東ドイツ人民議会は解散した。

解散までのほぼ半年間、人民議会の内務委員会で活動したガウクは、シュタージ解体のための特別委員会の委員長に就き、解体を妨害する政権側議員と闘い、シュタージ文書の公開を可能にする法律の制定を勝ち取った。しかし、人民議会が制定した法律は再統一後のドイツ連邦共和国には引き継がれなかった。そこでガウクをはじめとする人民議会議員は西ドイツ連邦政府と交渉し、統一条約に付加条項をつけることに成功した。これにより再統一後のドイツ連邦議会は、人民議会時代の法律を基に、シュタージ文書公開を取り決める新しい法律を制定する義務を負った。さらに、人民議会が選んだ一名の東ドイツ市民がシュタージ文書に関するドイツ連邦政府特別受託官に任命されることになり、九〇年九月二十八日の最後の人民議会で投票が行われ、ガウクが選ばれた。

当時、人民議会が解散するにあたり、人民議会議員四百名中の一四四名は、九〇年十二月のドイツ連邦議会選挙までの限られた任期の間、連邦議会議員の地位を得ることが決まっていた。ガウクはその中の一人だったが、人民議会での選出を受けて再統一直後に受託官に任命されたため、任期が始まったばかりの連邦議会議員を辞職した。党派性を排すためだったという。

シュタージが集めた膨大な文書は、再統一後のドイツ社会にきわめて深刻な問題を突きつけた。文書の内容が漏れると、魔女狩りにも似たIM探しが起こるという懸念があった。文書が公開された場合、西ドイツの諜報活動も明るみになるという安全保障上の問題もあった。さらに西ドイツの人々の間には、秘密警察問題に触れるこ

とを忌み嫌う雰囲気があった。

ガウクは一貫して公開を主張し、その実現に精力を注いだ。彼は、スパイ活動の被害を受けた当事者のみならず、第三者のジャーナリストや研究者にも文書の閲覧を許可することが、シュタージの活動実態の解明につながり、ひいては監視国家の抑止につながるという信念を抱いていた。彼によれば、文書の公開は東ドイツ市民のアイデンティティに関する問題だった。スパイ網の実態を知らなければ、かつて東ドイツに暮らした人々は人間としての自己理解が得られない。自分の人生の物語は、自分のものでなければならぬ。自分が生きてきた物語に秘密警察がいかに関わったのかを知らねばならないというのだ。

ガウクは諜報機関との駆け引きに勝たなければならなかった。軍事・諜報・警察・公安関係者が勢ぞろいした会合の席上、彼の腹心の事務局長ガイガーが、文書閲覧を制限しようとした諜報機関関係者を論破する場面の回想は興味深い（二八一―二八四頁）。憲法にあたるドイツ基本法が第一条で保障する基本権に「個性を自由に伸ばす権利」、すなわち情報の自己決定権が含まれると主張して、文書閲覧を制限することはできないと論じたガイガーの憲法学上の強い姿勢が、公安関係者を黙らせたという。安全保障上の懸念よりも、憲法が保障する人間の基本権が勝った。シュタージ文書の公開は個人の自由という基本権の制度的保障として実現したことがわかる。

もちろん、過去は不問に付すべきだと考えてシュタージ文書の公開に反対した人々は、東西いずれのドイツにも多かつた。文書の公開を求めて闘うガウクは、西ドイツでは気まぐれで頑固過ぎる男と見られ、東ドイツでは官僚的で西ドイツ寄りだと見られた。再統一の立役者だった当時のヘルムート・コール首相もガウクと対決した一人だった。彼は自分を対象にシュタージが収集した文書の公開を差し止めるため、首相退任後の二〇〇〇年にベルリン特別州行政裁判所に提訴した。コールは勝訴したが、連邦議会は二〇〇二年にシュタージ文書法を改定して、コールのような高い公的地位に就いていた公人に関するシュタージ文書の公開を一定の条件下に認める道

を開いた。

一九九〇年から二〇〇二年までブランデンブルク州首相を務めたマンフレート・シュトルペとの係争も世間の耳目を集めた。ベルリン・ブランデンブルク教会評議会会長や東ドイツ福音主義教会連盟副代表などの教会関係の要職を歴任したシュトルペは、東ドイツの人々に大変な人望があった。彼は再統一後、旧東独地域の州首相を務めたただ一人の社会民主党（SPD）の政治家でもあった。九二年、シュトルペは回想録を発表し、東ドイツ時代にシュタージの職員や幹部将校と定期的に会っていた事実を告白した。これを受けてガウクは、シュトルペはシュタージの重要なIMであったと発言したが、シュトルペはベルリン特別州行政裁判所にこの発言の禁止を求め訴えを起こした。行政裁判所はガウクにシュトルペに関する発言を繰り返すことを禁じた。

シュトルペは、彼に同情的な世論に支えられて失脚を免れ、州首相を二〇〇二年まで三期務めた後、〇二年から〇五年までSPD・緑の党連立政権時代の連邦政府に入閣し、連邦運輸・建設・住宅相を務めた。オスタルギーと言われる東ドイツ時代を懐かしむ気持ちを持つ大多数の人々の心情は、あきらかにシュトルペの側にあった。シュタージ疑惑が浮上した後の九四年の州議会選挙では、シュトルペを擁するSPDはブランデンブルク州で五割を超える得票を獲得し、過半数を制した。福音主義教会も彼を擁護した。ヴァイツェッカー元ドイツ連邦共和国大統領は、二〇〇九年に公刊された『ドイツ統一への道』の中で、シュトルペへの非難を「無知で破廉恥なこと」と述べている（岩波書店、永井清彦訳。六九頁）。ブランデンブルク州調査委員会がシュトルペを重要なIMだったと認める報告書を公表したのは、ようやく二〇一一年になってからのことである。

「自由」と「民主主義」を求めて

こうした状況では、ガウクは東西ドイツの和解を妨害する男と見られても不思議ではなかった。本書の第十二

章には、フンボルト大学元学長フィンクを擁護する学生たちがガウクに抗議するデモを行い、連邦受託官事務局前の道路を埋め尽くしたエピソードが生々しく語られている。旧SEDの流れをくむ民主的社會主義党（PDS）に近い新聞は、彼のことを「大審問官」呼ばわりさえした。

実際、作家クリスタ・ヴォルフの一九五〇年代末のIM歴が明らかになった一九九三年、東ドイツの文学的良心とも言える彼女の人格すべてを否定すべく執拗に攻撃を繰り返した西ドイツメディアを、ガウクは止めようともしなかった。当時、奨学金を得て米国に滞在していたヴォルフはガウクに書簡を送り、受託官事務局は彼女のシユタージ文書を報道機関にリークしたのではないかと問いただしたが、ガウクは三カ月後によく返書を送り、リークはなかったと事務的に回答しただけだった。彼の返書からは、六五年の第十一回SED中央委員会総会で党の方針に公然と反駁して以後、シユタージの威圧的な監視下に置かれた作家の苦しみを理解しようとする姿勢は読み取れない。九三年に問題になっていたのは、「東の人々の自尊心が踏みにじられる」（H. フィンケ）⁽⁷⁾ 事態だったが、ガウクの事務局はその片棒を担いでいると見なされた。東ドイツをナチに匹敵する第二の独裁体制とみなしたガウクの主張は、歴史の勝者である西ドイツの立場からなされた東の人々への不当な攻撃と受け取られる側面があったことは否定できない。

その一方で、シユタージ文書の閲覧に道を開いたガウクに、大勢の東の人々が敬意を示していることも事実である。本書で彼は、初めて訪れた町で近づいてきた人々から感謝されることがあると書いているが（三三五頁）、受託官事務局でシユタージ文書を閲覧することにより、ついに自身の過去の本当の姿を知ることができた人々は多い。事務局のホームページに公表された数字によると、⁽⁸⁾ 閲覧が始まった一九九二年一月から二〇一四年十二月までの閲覧申請総数は、延べ六百九十六万件にもぼる。そのうち、一般市民の申請は三百万件、公的機関の調査申請は百七十五万件、ジャーナリストや研究者の閲覧申請は三万件である。閲覧が始まって二十三年目にあた

る二〇一四年になっても、一般市民から六万七千件、公的機関から二百七十件、ジャーナリストや研究者から千四百件の申請があった。シュタージ文書に目を通して、新しい視線で自分の個人史を見つめようとする人々の申請は、これからも途切れないだろう。

「自由」と「民主主義」を実現すべく力を尽くしたガウクの闘いがなかったら、今でもシュタージ文書は公開不可となっていたかもしれない。彼が行った活動が東の人々の新しい出発を確実なものにしたことは間違いない。

二〇一五年にドイツに入国した難民申請希望者は、ドイツ連邦内務省によると約八十九万人にのぼるとい⁽⁹⁾う。排外的な主張を掲げる政党が支持を集める中で、いまだに格差を抱える東西ドイツ間の和解はやや後景に退いた感がある。今を逃したら、東西冷戦下に「自由」と「民主主義」を希求した一人の人物の自伝を紹介する機会はなくなくなるかもしれない。このような訳者のやや性急な申し出を快く受け止め、翻訳出版の勇断を下された論創社社長の森下紀夫氏と、編集で大変お世話になった森下雄二郎氏に厚く感謝したい。

翻訳を進めるにあたって多くの方々にご教示を仰いだが、なかでも訳者の度重なる質問に丁寧⁽¹⁰⁾に答えていただいたのみならず、数多くの貴重なアドバイスを授けていただいた立教大学講師ゲジネ・ゲスナー氏に深謝するとともに、校正を引き受けた新野忍に心からの感謝を捧げる。

二〇一七年八月 新野守広

〔著者〕

ヨアヒム・ガウク (Joachim Gauck)

1940年、ドイツ北部のロストックに生まれる。ドイツ民主共和国（東ドイツ）で神学を専攻後、福音主義教会の牧師となり、東ドイツの体制批判運動を担う。東西冷戦が揺らいだ1989年、新フォーラムに参加。1990年3月、東ドイツ人民議会で初めて実施された自由選挙で当選。同年10月のドイツ再統一後は連邦受託官として国家保安省の解体に関わった。2012年3月から2017年3月まで第11代ドイツ連邦共和国大統領を務める。

〔訳者〕

新野守広 (にいの・もりひろ)

1958年生まれ。ドイツ演劇翻訳・研究。著書に『演劇都市ベルリン』（れんが書房新社）、『知ってほしい国、ドイツ』（共著、高文研）、訳書にハンス＝ティース・レーマン『ポスト ドラマ演劇』（共訳、同学社）、マウリス・フォン・マイエンブルク『火の顔』、デアア・ローアー『最後の炎』（ともに論創社）など多数。第2回小田島雄志・翻訳戯曲賞受賞。立教大学教授。

ガウク自伝——夏に訪れた冬、秋に訪れた春

2017年10月20日 初版第1刷印刷

2017年10月30日 初版第1刷発行

著 者 ヨアヒム・ガウク

訳 者 新野守広

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

電話 03(3264)5254 振替口座 00160-1-155266

装丁 宗利淳一

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1667-8

落丁・乱丁本はお取り替えいたします